

金沢大学市民講座 「ウイルスとの闘いと共存—コロナ禍を乗り越えるために—」

金沢大学公開市民講座「ウイルスとの闘いと共存—コロナ禍を乗り越えるために—」が、金沢市の金沢大宝町キャンパス十全講堂で開かれた。同大の3人の教授が、新型コロナウイルスについてそれぞれの研究分野から講演した。



中村 裕之 教授

なかむら・ひろゆき 医薬保健研究域長。金沢大学大学院医学研究科博士課程修了。2018年から現職。

人感染するコロナウイルスは、風邪の症状を起こすものや、SARS（重症急性呼吸器症候群）など重症化伴うものなど6種類あり、今回の新型コロナは7種類目である。

コロナウイルスの表面には、それが細胞の表面にある鍵穴に結合して、細胞に入り込み、自身のコピーを作っていく。新型コロナは、この鍵と鍵穴の結合力が強く、それが、パンデミックの一因になっている。

また、感染のピークが発症の手前にあるため、感染者の半数は、症状のない感染者からの感染で、このことが、感染予防対策を困難にしている。



いちむら・ひろし 医薬保健研究域医学系教授。鳥取大学大学院医学研究科博士課程修了。2008年から現職。県の新型コロナウイルス感染症対策本部アドバイザーを務める。

市村 宏 教授

ウイルスが人間を宿主に

石川県内の新型コロナの流行を見てみると、4月の第1波に比べて、8～9月にかけての第2波のほうが感染者が増えていた。一方で、PCR検査数が増えたことや、濃厚接触者を丁寧に検査したからだと考えられる。

また新型コロナの流行を南路と金沢と分けてみると、高齢者から若年者に感染の広かりが見られた。同じ時期でも場所によって、流行の特徴が異なることがわかった。

れる。

加賀と金沢と分けてみると、高齢者から若年者に感染の広かりが見られた。同じ時間でも場所によって、流行の特徴が異なることがわかった。

た。

また新型コロナの流行を南路と金沢と分けてみると、高齢者から若年者に感染の広かりが見られた。同じ時間でも場所によって、流行の特徴が異なることがわかった。

られない。

新型コロナのようないくつかの重症化関与しているのかも

う研究報告があり、血栓での

こと。

日本国内で年代別の死亡率を見たところ、第2波では死亡率が著しく下がっている。50歳未満で基礎疾患がない場合は、季節性のインフルエンザよりも致死率が低いことがわかっている。しかし、新型コロナに感染すると、血管内に血塊（血栓）ができるやすくなることがわかつており、それが重症化にどれほど影響を及ぼしているのかはまだ明らかになっていない。フランスでは、発症から3か月半がたっても、感染者の87%に何らかの後遺症が出ていることなどがわかつっている。

こうした点が明らかにならなければ、季節性のインフルエンザと同じように扱えるのではないかと考えている。

血液型がO型の人は、新型コロナに感染しても重症化リスクが低いという（海外の）研究結果の報告がある。O型の人には肺塞栓症や深部静脈血栓などで動物の個体数は減少することがある。感染症からなることがわかつており、それが重症化にどれほど影響を及ぼしているのかはまだ明らかなことではない。フランスでは、発症から3か月半がたっても、感染者の87%に何らかの後遺症が出ていることなどがわかつっている。

こうした点が明らかにならなければ、季節性のインフルエンザと同じように扱えるのではないかと考えている。

血液型がO型の人は、新型コロナに感染しても重症化リスクが低いとい

う可能性がある。感染症のほとんどの動物由来。元々、自然

界でウイルスと動物が共生していただけ、開発などで生活する距離が近くなり、種を超えて家畜や人類に入ってくるようになつた。

感染症は数年後に再び起る

ときによくさが重症化に関与して

いる。

ウイルスは、生きた個体がないと生息できない。森林伐採などで動物の個体数は減り、絶滅危惧種もいる。ウイルスの新たな宿主として、人々は肺塞栓症や深部静脈血栓などで動物の個体数は減少することがある。感染症からなることがわかつており、それが重症化にどれほど影響を及ぼしているのかはまだ明らかなことではない。フランスでは、発症から3か月半がたっても、感染者の87%に何らかの後遺症が出ていることなどがわかつっている。

こうした点が明らかにならなければ、季節性のインフルエンザと同じように扱えるのではないかと考えている。

血液型がO型の人は、新型コロナに感染しても重症化リスクが低いとい

う可能性がある。感染症のほとんどの動物由来。元々、自然

界でウイルスと動物が共生していただけ、開発などで生活する距離が近くなり、種を超えて家畜や人類に入ってくるようになつた。

感染症は数年後に再び起る

ときによくさが重症化に関与して

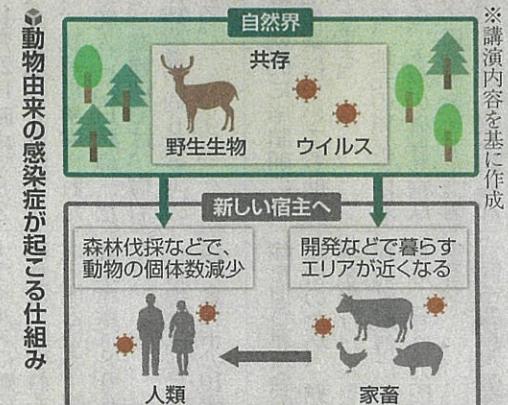
いる。

ウイルスは、生きた個体がないと生息できない。森林伐

採取などで動物の個体数は減少することがある。感染症のほとんどの動物由来。元々、自然

界でウイルスと動物が共生していただけ、開発などで生活する距離が近くなり、種を超えて家畜や人類に入るべきである。

ワクチン分配国際協力で



堤 敦朗 教授

つつみ・あつろう 人間社会研究域法医学系教授。東京大学大学院医学系研究科博士課程修了。2004～2005年にWHO、12～16年には国連に勤務。2012年から現職。

「グローバルな連帯」とは何かをまず考えたい。1990年代、世界では貧困やエイズウイルス（HIV）の感染拡大、乳児死亡率の高さなど様々な問題があった。国連は2000年に「極度の貧困と飢餓の撲滅」「児童死亡率の削減」など八つを目標に掲げた「ミレニアム開発目標（MDGs）」を採択、15年まで劇的に改善した。一方で、女性や障害者ら意識されない人たちもいた。

こうした背景もあって、15年間に採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」は、日本を含む、約170の国地域が参加（アメリカ除く）※10月1日時点）となり、国連には今年ノーベル平和賞を受賞した世界食糧計画（WFP）や国連児童基金（ユニセフ）など様々な機関があり、世界保健機関（WHO）もその一つだ。WHOは保健医療の専門家が集まつた組織で、高い専門性を持つている。たとえば新型コロナでは、ワクチンの開発や供給をどうすべきかなどのアドバイスを要論を言う人もいたが、国際機関の存在意義や価値について、しっかりとした知識で考える必要がある。

国際協力には、大きく二つの枠組みがある。「バイラテラル（2国間）」と「マルチラテラル（多国間）」だ。マルチラテラルは、複数の国が集まって一つの機関を作るもので、国連や経済協力開発機構（OECD）などが挙げら

れる。ワクチンの開発はマルチラテラルだ。今回の新型コロナもそうだが、世界の片隅で起きた感染症は、瞬く間に世界中に広まる。自國でワクチンを開発して全国民に接種しても、ほかの国で接種している。今後、人類がどう生きていくのか、私たちを考えなければならない。

現在、新型コロナのワクチンを世界各国で共同購入して分配する国際的枠組み「COVAX（コバックス）」がある。日本や欧州、中国など世界中に広まる。自國でワクチンを開発して全国民に接種しても、ほかの国で接種している。今後、人類がどう生きていくのか、私たちを考えなければならない。

ヒトの健康は、動物や環境とのバランスの上に成り立つ

ている。今後、人類がどう生きていくのか、私たちを考え

なければならない。

新型コロナウイルスの感染を未然に防ぐために、まず最初に取り組むべきは感染経路の遮断だ。主な感染経路は、手を介する接触感染と、せきやくしゃみなどによる飛沫感染の二つ。感染力があるかは不明だが、プラスチックに付着したウイルスは72時間残存するというデータがある。接触感染を防ぐには手洗い、消毒マスクの着用が有効だ。

新型コロナウイルスがエアロゾル感染するかどうかはわからぬ。ただし、小さな飛沫による感染予防には、密閉、密集、密接する状況を作らず、換気をすることが重要だ。

糖尿病、脂質異常症などの生活習慣病が、新型コロナに感染した際に重症化するリスクがあると言われて

いる。禁煙、肥満の解消、高血圧の改善などを実践する。禁煙、肥満の解消、高血圧の改善などを実践する。

免疫力を高めるには運動、睡眠、健康的な食事である。運動習慣病を予防するには、運動不足、社会的交流の減少を招いた。高齢者にとって運動量の低下は、筋力などが低下して心身が弱っていく「フレイブ」に結びつくおそれがある。フレイブは、心肺機能の低下、周囲への無関心、うつ状態につながる。

運動は、精神面への好影響があると言われている。運動で前向きな気持ちを保ちた

りながら、外出自粛は感染予防にはなかなか有効である。

では、生活習慣病を予防して免疫力を高めるには何をすればいいか。健康的な食事をとること。ビタミンを含んだ食べ物が良い。中でもニンニクに含まれるアリシンはビタミンB1の吸収を高めてくれ、血液が固まりやすくなるのを防ぎ、血栓予防にもつながる。

一方で、免疫を高めるには運動、睡眠、健康的な食事である。

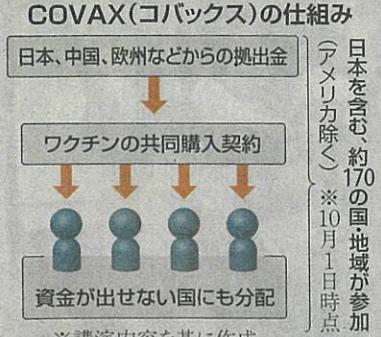
そして、しっかりと睡眠を取りこと。自粛生活だと生活リズムが乱れがちになる。バランスのとれた食事、適度な運動、睡眠で免疫機能が高まる、新しいコロナの予防にもつながる。

新型コロナと共存する上で大切なのは「正しく恐れる」ことだ。差別や偏見は絶対にあってはならないことだが、施設への風評被害など大きな問題になっている。正確で科学的な根拠に基づいた情報が必要だ。

お互いに距離をとる、ソーシャルディスタンスが強調されているが、距離を保てば社会的交流、接触がなくなってしまう。物理的な距離を保ちながら、社会的なつながり「ソーシャルキャピタル」を維持し、促進する。社会的にはお互い活発につきあっていくこ

とが大切だ。

国際的枠組み COVAX(コバックス)の仕組み



開発目標（SDGs）は、達成に向けて「誰一人取り残さない」ということがテーマになった。国連には今年ノーベル平和賞を受賞した世界食糧計画（WFP）や世界保健機関（WHO）もその一つだ。WHOは保健医療の専門家が集まつた組織で、高い専門性を持つている。たとえば新型コロナでは、ワクチンの開発や供給をどうすべきかなどのアドバイスを要論を言う人もいたが、国際機関の存在意義や価値について、しっかりとした知識で考える必要がある。

国際協力には、大きく二つの枠組みがある。「バイラテラル（2国間）」と「マルチラテラル（多国間）」だ。マルチラテラルは、複数の国が集まって一つの機関を作るもので、国連や経済協力開発機構（OECD）などが挙げら

れる。ワクチンの開発はマルチラテラルだ。過去に失敗した場合、コバックスからワクチン購入できず、感染爆発が起きかねない。当然、世界に大きな影響が出る。

国境は概念で過ぎず、あらゆることを世界規模で考える必要がある。